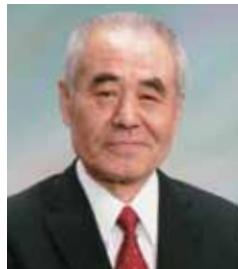


## 信を通わす

9

## 札は心に残る

著作権の関係上、表示できません。



作家  
青木 新門氏  
(あおき・しんもん)

映画『おくりびと』が日本の映画賞を総なめにして、米国アカデミー賞まで受賞した。私が主演俳優の本木雅弘君と交信するようになったのは、16年前拙著『納棺夫日記』を上梓して間もなくのことだった。彼がインドを旅した本『納棺夫日記』の中の一文を引用させてくれとの依頼の電話がきっかけとなり、やがて映画化しただけとの申し出があつて私は彼の熱意にほだされ、「貴方しか映画化は出来ないだろ」と快諾した。

その後十年間彼は、いろいろと働きかけをしたらしく、なかなか実現しなかった。やがて彼の諦めることのない熱意が人を動かし製作委員会が立ち上がり動き出した。その時点では私は、富山で撮影することになるだろうと勝手に思い込み、地なしをしておかねばと何人かの人に協力をお願いした。

中尾会長にもお願いした。その時会長は「何をしろといふのか」と問われた。私は五億円ほどお願いできなかと云うと「旗を振れといふこと」と云われた。確約されたわけではなかったが、その時になれば考えよつと前向きな返事を頂いた。やがて山形の庄内で撮影されることを

知つて私は愕然として原作者であることを辞退した。プロトコーサーが富山までやつてきたが私はシナリオの内容にも文句をつけて頑として首を縊に振りなかつた。次に本木君自身が富山までやって来た。彼は出された料理に手をつけないとなく一時間も正座したまま姿勢を崩さなかつた。私は彼の真摯な態度に感銘して、本木さん映画は映画、本は本でいいやないですか」と云つた。そして「だが一人だけ協力を約束して頂いた方に会つてほし」と云つて本木君は「ぜひお会いさせて下さい」と応えた。その場でインテリックへ電話をすると、会長はおられたので一人で今から伺いたいと云つて、帰らうと思つてこたところだからとやつて来られた。本木君の所為で

で撮ることになつたことを会長に説明している礼儀正しい態度を見ながら私は、礼は仁や義の具体的表現とみなす儒教の教え



中尾会長と本木雅弘氏